

傾向にある(図IV-3)。なかでも1977年の200海里漁業専管水域設定による規制を契機として、その後減少が著しくみられる。塩釜漁港の動向を見ると、水揚げ数量や入港船の減少の反面、搬入水産物の増加が著しくみられる。この傾向は近年のことであり、1985年頃までは水揚げ数量に占める搬入水産物の比率が10%~20%程度であったが、1988年以降では40%を越えるに至っている。1988年ではこの比率は47.9%であり、塩釜漁港の水揚げの約半分を占めるにいたった。

(4) 浅海養殖産業

風光明媚な松島湾は浅海養殖産業の盛んなところでもある。ここでは海苔・わかめ・こんぶの養殖、剥きカキ・移出種ガキ・アサリ・アワビの生産などが行われている。これらの養殖や生産には、塩釜市漁業協同組合・塩釜市第一漁業協同組合・塩釜市浦戸漁業協同組合・塩釜市浦戸東部漁業組合の4組合に属する組合員が携わっている。1992年における生産量・生産額を見れば、乾のりの生産額が約3億5千4百万円と最も多く、この生産では8月末に種付けが行われ、9月の彼岸前(15日)あたりから翌年3月初め頃まで収穫がなされる。乾のりの等級には10数種類があり、この等級は組合毎に決められている。全国海苔協同組合連合会で入札日が決められ、この入札単位は1箱3,600枚となっている。なかでも「秋芽(あきめ)」と呼ばれる10月末~12月の物は、有明海や千葉の海苔が年内に出荷されないために、デパートのお歳暮商品として高価格で入札されるとのことである。組合員のなかで最も生産量の多い人は年間約200万枚を出荷し、平均的に約150万枚を出荷しているとのことである。のりの生産には多額の設備投資が必要であり、1,500万円の機械を導入すると2,000万円以上の収益を上げなければならないこと、またのりの生産では台風による被害も多いことなどから、海底の土壌を改良してアサリなど貝類の生産にも力が入れている。アサリの生産

額は乾のりに次いで1990年では約2億円であり、この生産量は412トンであった。アサリの生産は4月10日から始められ、9月10日まで行われている。この間の7月に、アサリの産卵時期にあたる約1週間から10日間の休漁期間を挟んでいる。

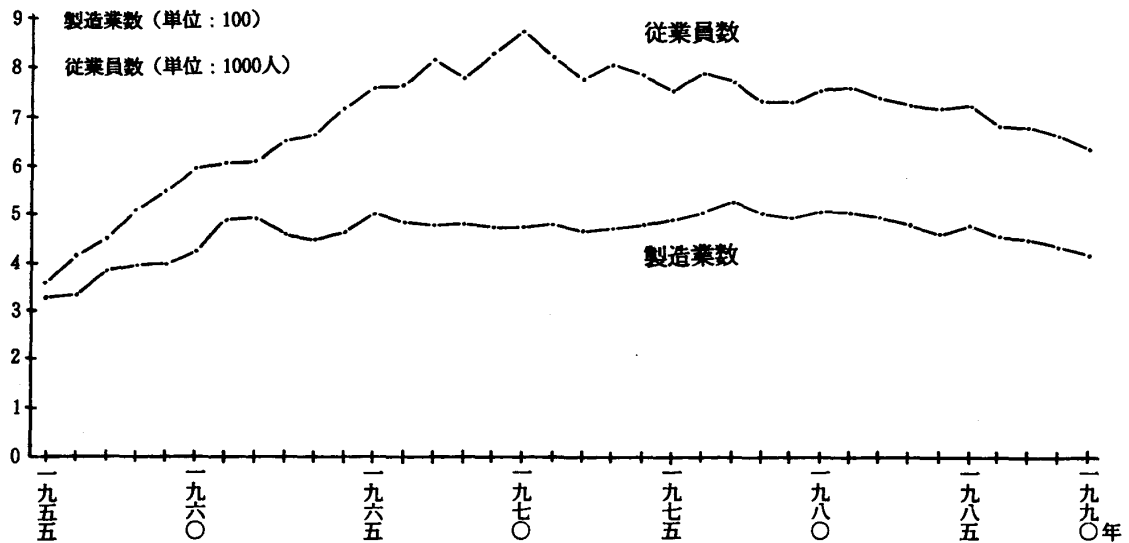
剥きカキの生産額は、乾のりとアサリに次いで約1億9千7百万円と、浅海養殖漁業では第3位の生産額を上げている。カキは8月末~9月中に種付けされる。種付けは、約230枚のホタテの殻を1 m 50 cmの長さに繋いだ原板を湾入の棚の場所に投入して行われる。次に種の付いたホタテの殻を、1 m 80 cm~3 mの針金に17~18枚を付け、潮の流れの緩いところに持っていく。剥きカキは10月初めから5月末まで収穫され、3月20日までは主に生食用として出荷され、4月1日以降には加熱加工したものが出荷されている。

以上の乾のり・アサリ・剥きガキの3種類の生産額で、塩釜市の浅海養殖漁業における全生産額の約82%を占めており、これらが塩釜市における浅海養殖漁業の中心であると言えよう。

3 製造業

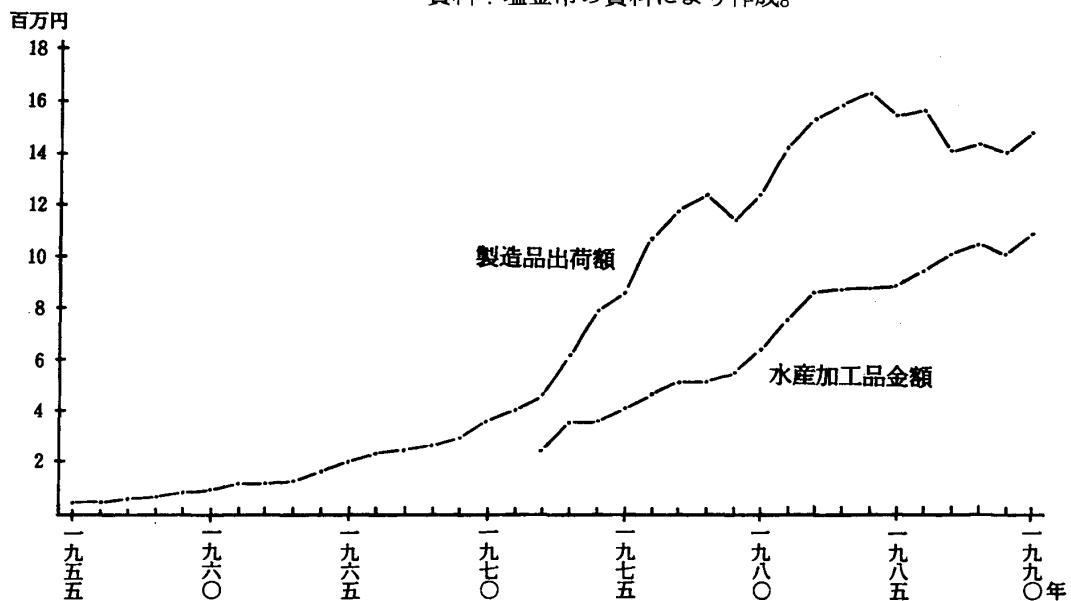
塩釜市における近代工業は1909年(明治42)に北浜地域の埋立地に開設された佐藤造船所に始まる。明治末期には本格的な機械工場として三陸汽船塩釜工場が操業を開始した。その後、大正期にもいくつかの造船所や機械工場が操業を開始した。さらに1938年(昭和13)には東北地方屈指の鋼鉄船建設施設をもつ造船会社として東北船渠鉄工株式会社が北浜地区に立地し、操業を開始した。この東北船渠鉄工株式会社はその後解散と再建を繰り返し、1958年に東北造船株式会社となり、1987年には東北ドック鉄工会社として現在に至っている⁵⁾。

一方、明治中期以降、かつお・まぐろの塩蔵品、かつお節、むき鮫・焼鮫など、塩釜港から水揚げされた水産物の加工業が盛んになってきた⁶⁾。大正期



図IV-4 塩釜市における製造業数と従業員数の推移

資料：塩釜市の資料により作成。



図IV-5 塩釜市における製造品出荷額と水産加工品金額の推移

資料：塩釜市の資料により作成。

になると焼き竹輪などの練り製品の製造が盛んになり、さらに缶詰生産も盛んになってきた。第二次世界大戦後は食料不足もあって塩釜港での水揚げも増加し、水産加工品の需要も増加した。しかし戦後の食料需要が好転するにつれ、水産加工業者はしだいに淘汰されてきた⁷⁾。そして1969年11月には新浜三丁目の敷地に総工費5億8,900万円をかけて水産加工団地が完成した。この水産加工団地の広さは

13,200㎡で、魚肉処理施設、・水産物一次処理施設・倉庫・冷凍庫・冷蔵庫などが設置され、さらに公害処理施設も完備されている。この加工団地は塩釜市水産加工業協同組合員に賃貸され、操業されている。

ここで最近の塩釜市における製造業の推移をみよう。図IV-4は塩釜市の資料により1955年以降の製造業に関する事業所数の変化と従業員数の変化を示

したものである。これによれば同市の製造業事業所は1955年に327であったのが、その後漸増し、1978年には527に達した。しかしその後漸減して1990年には421となっている。一方、製造業従事者数をみると1955年には3,566人であったのが、その後急増し、1971年には8,716人に達した。しかしその後は従事者数も減少し、1990年には6,408人となっている。すなわち塩釜市では製造業事業所数・従業員とも1980年代以降に漸減状態にある。

さらに1955年以降における製造品出荷額の推移を図IV-5に示した。これによればその出荷額はインフレーションの影響もあって1955年以降増加してきた。1979年にはオイルショックの影響もあって前年より減少したものの、再び1984年まで増加してきた。しかしその後製造品出荷額は減少してきたが、1990年にはやや増加している。

製造品出荷額のうち1972年以降の水産加工品金額をみると、これはオイルショックの影響もなく、ほぼ一貫して増加してきた。水産加工品金額の製造品出荷額に占める割合は当初50%台を推移していた。しかし最近にその割合は増加してきており、1986年には60%を超え、1987年には70%を超えるに至った。1990年にその割合は73.7%を占めており、塩釜市では水産加工の地位が近年にますます上昇してきている。

表IV-2 塩釜市における製造業の構成(1990年)

	事業所数	従業者数	出荷額
食料飲料	68.0%	81.0%	90.0%
木材	4.0	2.8	2.0
家具	6.7	1.0	0.2
パルプ紙	1.7	1.4	0.7
出版印刷	3.1	1.6	0.4
金属	6.2	1.7	0.7
機械	4.8	2.2	1.4
輸送用機械	4.5	4.3	2.0
その他	1.0	4.0	2.6
合計	100.0%	100.0%	100.0%
総数	421	6,408人	14,762,023円

資料：塩釜市の工業統計調査により作成。

表IV-2は1990年における塩釜市の製造業の構成をみたものである。これによれば食料飲料の全製造業に対する割合は、事業所数で68.0%、従業者数で81.0%、出荷額で90.0%というように、いずれも圧倒的多数を食料飲料が占めている。そして前述のように、食料飲料のほとんどを水産加工業が占めている。食料飲料につぐのが、明治期以後に塩釜港湾北岸の北浜で行なわれてきた造船業などの輸送用機械であるが、近年の造船不況もあって、それは多くを占めるに至っていない。

また1990年における従業員規模別の製造業事業所数をみると、塩釜市の資料によれば、従業員100人以上の事業所数は421事業所の2.1%にあたる9にすぎない。一方、従業員1~9人の事業所は63.9%に当たる269に達する。残りの34.0%に当たる143事業所が従業員10人以上100人未満の事業所であった。ところで、従業員規模別の事業所による製造品出荷額をみると、従業員100人以上の事業所による出荷額が1990年には市全体の出荷額の23.3%を占めていた。一方、従業員1~9人の事業所による製造品出荷額の割合は10.1%を占めるにすぎない。いずれにせよ、塩釜市では中小企業が多くなっている。

4 水産加工業

(1) 水産加工業の発達過程

宮城県では、三陸沖の好漁場を近くに持つことや、北洋漁業の基地としての港湾が発達していることから、これらの漁港周辺に水産加工業が発達してきた⁸⁾。

塩釜市においても水産加工業は、塩釜漁港の発展と共に推移してきた。港湾施設の拡充や魚市場の開設を背景に水揚量が拡大し、鮮魚流通のほかに、水産加工品の製造が盛んになってきた。

もともと塩釜市における水産加工品の製造は、魚屋などで売れ残った鮮魚を加工したことに始まる。魚を塩漬・干魚・焼魚として加工したものが一般加工